

第10章

困りモノ



アデン港。イギリス植民地時代（1839～1967年）は、世界有数の船舶寄港数を誇る自由港であり、アラビア半島の最先進地域であった。だが、栄華を極めたアデンもイギリスからの独立、社会主義化、北イエメンとの対立、そして南北統合を経て今日に至るまで、不幸の連続であったという人もいる。しかし、21世紀のイエメンの将来はアデンが握っている。

南北分断

長い間、イエメン政治最大の「困りもの」は南北分断状態であつた。シバ王国をはじめとする古代南アラビア諸王国の時代からイエメン人たちは「アラブの源流」としての自覚と誇りを共有しており、アラブという人種的アイデンティティーと「部族」という生活レベルのアイデンティティーの中間に、「イエメン人」としての自己認識が明確に存在する。そのイエメンが二十世紀のほとんどを分断状態で過ごした直接の原因は、一九〇四年、オスマン・トルコとイギリスがイエメン人に何の相談もなく「国境確定交渉」をしたことにさかのぼる。このときの線引きは帝国主義者の常としてかなり乱暴で、紅海の入口バール・アル・マングブ岬からアラビア半島を横切つて、ペルシャ湾岸のバハレーンに至る直線でアラビア半島を二分し、上がトルコ、下がイギリス、と取り決めたのである。

大英帝国は一八三九年に、ヨーロッパとアジア植民地を結ぶインド洋航路の水・石炭の中継地確保のためにアデンを占領し、その後南イエメン一帯を保護領としていた。一方、北イエメンは十六世紀以来名目的にオスマン・トルコの支配下にあつたが、実情は部族勢力などの群雄割拠状態であり、コンスタンチノーブルからサナアに「総督」が送られてもその支配は都市に限られていた。山岳地では地元部族の抵抗が激しいために多くのトルコ

兵が命を落とすのでトルコでは「イエメンはトルコ兵の墓場」と恐れられていたという。これが二十世紀初頭の南北イエメンの政治状況であった。

第一次世界大戦を契機にオスマン・トルコが衰退すると、北イエメンはイマームを国王とする「ムタワツキル王国」として独立する。イマームは当時の先進都市アデンを経由してヨーロッパから「非イスラム的」な思想が流入することを恐れ、近代化を拒否する鎖国政治を採用した。この結果、近代化を求めるイエメンのインテリたちは教育と自由を求めてアデンに流出し、開国・近代化を目指す「自由イエメン運動」を開始する。

「自由イエメン運動」は反イマーム勢力を糾合し、アラブ民族主義を唱えるエジプトのナセル大統領に支援されて一九六二年に「イマーム打倒」革命を起こす（九月二六日革命）。革命派はサナアを制圧して「イエメン・アラブ共和国」の樹立を宣言したものの、イマームは北部山岳地に逃げ延び、サウジアラビア、ヨルダンなどのアラブ王制国家の支援を獲得して部族勢力による軍事力を立て直し、爾後「共和国派」と「イマーム派」との間で十年にわたる内戦状態に突入する。

一方、この革命に刺激されるように翌一九六三年、南イエメンのラドファーンでも反英独立闘争が本格的に始まる（十月十四日革命）。北が内戦で混乱している間に南の反英独立

闘争は左派勢力を中心に先鋭化し、イギリスは一九六七年十一月に植民地を放棄して南イエメンが独立する。一方、北部では内戦が膠着状態に陥り、アラブ諸国の調停で共和国派とイマーム派との間で「イマームの追放」を条件に妥協が成立、部族勢力が影響力を保持する右派勢力による新政権が誕生した（一九七〇年）。こうして南イエメンは左派政権、北イエメンは右派優勢という構図が成立、当時の東西冷戦構造にも巻き込まれて、その後七二年、七九年、八二年の三度にわたって南北間の武力衝突が発生することになる。内戦が勃発するとその都度アラブ諸国の調停で停戦となり、毎回儀式的な「統一」への意思確認が行われたが、多くのイエメン人にとって統一は政治的スローガンにすぎず、当面実現不可能と考えられていたのである。とはいえもともとアデンの人々の大半はイギリス時代にイエメン各地（とくにホジャリア地方）から仕事や教育を求めて流入してきた人々であり、分断時代を通じて庶民のレベルの交流は比較的自由に維持されていた。

さて南北分断状態の終結はあつけなく訪れた。

アデンでは一九八六年に政権政党で「アラブ唯一のマルクス・レーニン主義政党」であった「イエメン社会党」の内紛から、数千人の死者を出す大規模な市街戦が発生した（一月十三日事件）。この結果多くの優秀な人材を亡命、戦死などの形で失い、政権は著しく弱

体化し、加えて八九年に東ヨーロッパ諸国が次々と崩壊していくなかで、社会主義政権は風前のともしびとなつた。そこでアデンの指導者たちは国家が崩壊するよりは南北統一による政権維持に賭け、急転直下悲願の統一が達成されたのである。

内戦 一九九〇年五月二二日、東西ドイツよりも半年早いイエメンの無血統一達成はほとんどの国民に熱狂的に支持され、統一に反対する人はごくわずかであつた。

しかし統一前に双方の首都で行われた二つの統一反対デモは、統一イエメンの行方を暗示して象徴的であつた。サナアでのデモは保守的イスラム勢力が組織したもので「墮落し、無神論を唱える共産主義者との統一は許されない」と主張した。敬虔なムスリムであるイエメン庶民の大半は「共産主義」（社会主義も同様に語られる）という言葉をお口にするとときには眉をひそめるものである。

一方、アデンでのデモは職業をもつ女性たちが組織したもので「無知で野蛮なイスラム主義者との統合などしたくない」というものであつた。統一以前のアデンでは、社会主義の理想を体現した憲法に則り、教育、職場などに男女平等の原則が浸透していた。実際、アデンの公務員には女性も多く、髪をヒジャーブで覆う程度で男女の空間を分離することなく仕事をしていたのであり、空間分離が厳格なサナアの状態とはまるで異なつてい

た。そこで統一によつて「シャリーア」(イスラム法)が憲法の基礎となり、イスラム的な規制が強化されることを危惧して彼女らは示威行動を起したのであった。

実際に統一によつて最も大きな変化を経験したのはアデンである。この「社会主義」を放棄した結果、従来慢性的に品薄であつた野菜や雑貨が北部から自由に流入するようになつて、人々の食生活は格段に改善されたし、これまで秘密警察の存在が怖くて話をする事もできなかつた外国人とも自由に話ができるようになった。

しかし良いことばかりではない。内閣、議会など国の中枢機能はすべてサナアに移つていき、アデンは「経済首都」「冬の首都」とは名ばかりの一地方都市に格下げされてしまつた。これだけでも、最盛期には世界第二の船舶寄港数を誇つた自由港アデンの歴史を知るアデンっ子 アデニー のプライドを傷つけるのに十分であつた。

また、統一国歌は旧南、統一国章は旧北のものを採用するなど「対等」の体裁を整え、大臣の数もほぼ折半して、一つの省で大臣が北出身なら副大臣は南、大臣が南なら副大臣は北といったぐあいに両者のバランスを配慮したものの、その実は人口比(北が約一千万人、南が二五〇万人)、経済力で勝る北の「軍人、部族勢力」が政権の中枢部を握る構造であることは誰の目にも明らかだつた。加えて、統一前に打ち出されていた「アデン自由港」



社会主義時代のアデンは権力闘争が激しかった。ほとんどの建物はイギリス時代に建設されたものをそのまま使い回している。(スチーマー・ポイント)

再建計画が、ホデイダ港（北イエメンの主要港、紅海沿岸）に利害をもつ北の政治家・商人の抵抗で、統一後いつこうに進捗しないこともアデンの人々の統一への失望感を募らせる結果となった。

一九九三年四月に統一後最初の国会議員選挙が行われたが、旧南の政権政党「イエメン社会党」(YSP)は議席数で第三党に転落し、第二党に躍り出た北部部族とイスラム勢力の「イスラム改革党」(イスラーム)とはことあることに対立、同年夏にはYSP書記長でもあるアルビード副大統領が「身の安全が確保されない」としてアデンに引きこもってサナアでの会議をボイコットするなど統一の亀裂が表面化しはじ

めた。

その後の国内外諸勢力の調停努力も空しく、一九九四年五月には旧南北軍の間で戦闘が始まり、双方の空軍がアデン、サナアを空爆する本格的な内戦状態に突入した。アルビードらはアデンに立てこもり、アデニの北への不信任感、不満を背景に新国家「イエメン民主共和国」の樹立を宣言した。しかしアデニー以外に再分離を支持する国民は少なく、戦況は圧倒的に北側に有利に展開し、孤立したアデンは七月に陥落して二カ月間の内戦は終結した。

こうして統一イエメン最大の危機は乗り越えられたのだが、アデンの人々の不満は一向に解消されていない。例えば内戦後、植民地時代からアデンで生産を続けていた唯一の国産ビール「シエラ」の工場は、イスラム勢力の意向で閉鎖されてしまったし、旧南イエメ



1839年にイギリスが最初に上陸したシエラ島。この島の名前にちなんで、「シエラ」と名づけられたビールは1994年の南北内戦まで生産されていた。

ンの軍人はほとんどが「退役」させられた。こうして、アデニーの北に対する不信感にはさらに無力感が加わったのである。

もちろん、アデニーのこうした感情を放置することの危険性を政府も十分に理解しているので、内戦後はアデン自由港再建計画の本格化、「冬の首都」として大統領の滞在期間の延長など、それなりの配慮は行っている。それに、そもそも多くの専門家の指摘するように、アデンの活性化なしにイエメン経済の活性化はありえないのであり、アデンは「困りモノ」であると同時に統一イエメンの「期待の星」でもあるのだ。

アデニーは北部山岳部族民を「ダハバーシ」と呼ぶ。これは半ば蔑称である。
無秩序

もともとはサナアの国営テレビ製作のコメディードラマに出てきた道化役の男の名なのだが、「いなかもの」の代表のようなこの男の「ルールを無視した無教養なふるまい」が、山岳部族民の行動とそっくりだと感じたアデニーたちは、この番組の放映以降この言葉を好んで使っているのである。アデニーにとって、ダハバーシは秩序「ニザーム」を破壊する「困りモノ」である。

統一直後から、北からやって来る役人や訪問者がアデンを「汚染」しているという声は頻繁に聞かれた。例えばアデンの交差点のルールは、イギリス植民地の名残で信号機のな

い「ロータリー型」であり、先にロータリーに入った車に優先権がある。問題はこのシステムは交通量が比較的少なく、ドライバーが交通ルールを遵守するという前提のあるところでは機能しないことであり、統一後アデンにやって来た北からのドライバーはロータリーを見るのは生まれて初めてでルールを知らない。そこで交差点を左折するときに反時計回りに四分の三周することなど思いもよらず、いきなりロータリー内を逆行しはじめたのである。

また、アデン市内の片道二車線の道路では内側車線は「追い越し車線」であり、従来はこのルールが遵守されており不必要に内側車線を走っていたら、罰金を科されたものだという。ところがこれも我がちに走りたがる北からのドライバーが流入すると二車線ともに常に渋滞という事態が発生した。さらにこうした規制を監視するべき交通警察にも「北の悪習」が浸透し、警官による「袖の下」バクシーシ 要求が見られるようになった。

まだある。社会主義時代のアデンでは武器の携行は禁じられていたが、統一後ダハバーシたちがジャンピーアとライフルをぶら提げて町を闊歩するようになり、治安状況が悪化したとアデニーは嘆く。

植民地時代にブリティッシュ・ペトロリアム(BP)社の「アデン精油所」に勤務した

経験のあるアデニーたちは、当時の二四時間三交替制の下での規律正しい仕事ぶりを懐かしむ。その口ぶりには、ダハバーシさえいなければ自分たちの手でアデンを發展させることができるのに、という悔しさが言外ににじむ。

このようにダハバーシを、「秩序を理解することも守ることもできない田舎もの」とする偏見は、北部の人々がアデニーに対してもつ「共産主義に染まってアツラーの道を踏み外し、酒を飲み、名誉を忘れたふぬけもの」という偏見と対をなしている。

しかし、「秩序」は近代化にとって不可欠な要素であることは確かで、ましてや自由貿易港をつくり外国からの投資を呼び寄せようとするならば、港湾、水、電気、電話などのインフラのみならず、「規律正しい労働者」「効率的な行政」「賄賂を要求しない政治家」など「秩序」を重んじる風土がなければならぬ。

内戦後自由港計画は本格的に始動するのだが、それは政府が開発権をサウジの財閥（ハドラマウト出身者である）に二五年契約で売り出し、シンガポール港湾局がコンサルタントとなって韓国の建設会社がコンテナ棧橋の建設に乗り出してからである。シンガポールのコンサルタントは「秩序とルール」を重んじる。なにしろ道ばたにガムを捨てたり、公衆トイレの水を流し忘れると罰金を取られる国である。イエメンでも彼らは妥協しない。

ある日の午後、建設中のコンテナ棧橋に軍人がボートに乗ってやって来て、工事関係者の制止も聞かずに海を見ながらカートを嘔みだした。自由港地域内にはカートの持ち込みは認められておらず、イエメン人労働者もカートを嘔むことは禁じられているにもかかわらず、である。シンガポール人のコンサルタントは望遠カメラでこの様子をビデオに撮り、なんと直接大統領府に送りつけたという。それ以降、いっさいそんな狼藉を働くものはいなくなつた。もちろんこれは政府がアデン自由港に特別の配慮をはらっているから可能になつたことだが、この話、アデニーは密かに拍手喝采しているにちがいない。

人質事件(イフティターフ)

イエメンの将来は「観光産業」にかかっている、という意見がある。

事実、外国人ズレしていない素朴な国民性とダイナミックな自然景観、そしてアラビア



アデン・コンテナターミナル。ヨーロッパとアジアの中間に位置するアデンは立地に恵まれており、インフラの整備と政治的安定が確保できれば「アデン復活」も夢ではないと、アデニーは期待している。

ンナイトを彷彿とさせるエキゾチックなサナア旧市街の町並など、外国人の「異国趣味」を満たす観光資源には事欠かず、それまで知る人ぞ知る「アドベンチャーツアー」程度だったイエメンの観光人気は一九九四年の内戦終了後うなぎ上りとなり、日本からもパックスアー、バックパッカーの数が飛躍的に増えた。九七年には在日イエメン大使館でのビザ発給件数は初めて年間千件の大台を超えたのである。もちろんイタリア、フランス、ドイツなどの「観光先進国」からのツアー客も着実に増加し、このブームを当て込んだホテル、レストラン、旅行エージェント、お土産屋が相次いで店開きし、ランドクルーザーによる観光タクシーの数も爆発的に増加した。このぶんなら、観光産業が石油・ガスと並ぶ一大産業となる日も近い、と多くの関係者が期待したものである。

しかし、このイエメン人気に水を差した「困りもの」が山岳部族民「カビーリー」による「外国人人質」事件の頻発であった。地方の幹線道路を走っている観光客を乗せた車を待ち伏せし、そのまま車ごと自分たちの部族領域に連れて行ってしまふのだ。ひとたび部族領域に入ってしまうと政府の警察力はほとんど及ばないので、人質奪回のためには周辺の部族長などを間に立てた交渉が必要となる。

人質誘拐の目的は「われわれの地域に開発プロジェクトをよこせ」だの「犯罪を犯して



部族民による観光客人質事件を予防するため、治安当局はマーリブ行き観光客に「隊列」を組ませ、これを警護してマーリブまで送り届けることにした。この結果、毎朝10時頃には砂漠の入口に観光用ランドクルーザーが50台以上の隊列をつくることになった。(サナア～マーリブ道路、ジョウフ分岐。1998年4月撮影)

投獄されている自分たちの部族民を釈放せよ」だのといった政府に対する要求を聞いてもらうための「取引材料」を得ることにあり、「外国人に対する恨み」や「身代金目的」ではない。このため人質に危害が加えられることはほとんどなく、一九九五年以降一〇〇件を超える人質事件が起こっているが、これまでの事件で部族民によって人質が殺害された例はなく、ほとんどの場合は数週間以内に無事に解放されている。

しかし、いかに「命に危害は加えない」とはいえ、事件が発生すればその救出のために軍やら治安部隊は出動するし、自国民保護のために外国大使館もおわらわとなり、マスコミは本国で大げさに報道する。この結果、一つ事件が起こる度にツアーのキャンセルが続出し、旅行会社はあがったりである。と

くに一九九八年末に発生した国際的イスラム組織による誘拐では、治安軍との銃撃戦で人質外国人が死亡するという悲劇が発生した。これは部族民による人質事件と本質的には異なり、例外的な事件ではあるが被害者が出たという事実にはかわりがなく、日本政府も日本人観光客に対して「観光旅行自粛」を呼びかけるなどしたため、観光産業は破壊的なダメージを受け、多くの国民が仕事にあふれてしまった。

人質事件を理解するには、部族の論理を理解しなければならない。イエメンの部族社会の規範では、部族民がよそ者に対して、自らの領域を通過することを許可した場合、その部族は旅行者の身の安全を保障する義務を負う。義務は部族の「名誉」にかけて果たされなければならないし、義務が果たせないことは「恥」である。繰り返し説明しているようにカビリーにとって、恥 アイブ はなんとしても避けねばならないモノである。

イエメン山岳社会においては部族の自立性が強く、政府の権力は部族領域のなかには直接には及ばない。この意味では「政府」といってもその存在感は部族に毛が生えた程度のものでしかない。

さて、政府が観光ビザを発給したということは、政府が外国人旅行者の安全を保障したということの意味し、それにもかかわらず人質にとられるのは政府にとっては「恥」であ

る。政府に不満をもつ部族は政府にこうして「恥」を与えることでこちらの言い分を認めさせようとするのである。「恥」をきわめて重くみる誇り高きイエメンだからこそ成立する政治的ゲームと言えよう。

一方、客のもてなしが悪いこともまたイエメンの部族民にとっては「恥」なので、誘拐したほうは人質を「賓客」として最大限のもてなしをしなければならぬ。水も電気もないようなところでも、昼御飯には羊をほぶり、昼食後には最上級のカーツがふるまわれる。これまでも解放された「人質」たちの、誘拐した部族民に対する印象はおおむね良い。

そこで物好きな外国人の間では「人質体験ツアー」というアイデアが浮上した。この話を現地旅行会社の社長にもちかけたのだが、「水も電気もないところにトイレットペーパーを差し入れに行く身にもなってくれ」と、



アデンに入港する日本の豪華客船「飛鳥」(1998年3月)。盛り上がりかけた日本からの観光旅行ブームも、「人質事件」の余波でとん挫してしまった。

はなから取り合ってもらえなかった。

新しい女性像

ある日の午後、所用があつて日本大使館へ出かけた。大使館に入るガソリンスタンドの角を曲がったところで、全身をシャリシャフ姿で覆つた黒づくめの女性が車に向かつて手を振るようにして呼び止めた。サナアの町なかで黒づくめの女性が見ず知らずの車を呼び止めるなどというのは尋常なことではない。よほど切羽詰まつた事情があるのかもしれないと思い車を停めると、その女性は「Can you help me?」と英語で話しかけてきた。窓越しに「どうしたのですか」と尋ねると、彼女は「これを読んで下さい」とノートをちぎつた鉛筆書きの紙を手渡してきた。

そこには、ちよつとたどたどしい英語で「私はイエメンが嫌いです。イエメンの女性には希望がありません。私の父と兄は私に勉強を続けさせてくれません」と書いてあつた。おやおや、意外な展開である。

最初はイエメン女性の地位改善運動か何かの回し者が、外国人をターゲットに募金でもしているのかと思つたが、その紙はさらに裏に続いていた。そこには「私は日本に行きたい。日本で勉強したい。でもパスポートがありません。助けて下さい。日本人はとても親切だと聞きました」と書いてある。ちよつと待つて、こりやいつたい、どういうことだ。

「大使館の警備の人がなかに入れてくれないので、大使館員に会って話ができないので」と訴える。そりゃそうだ、パスポートもなく、大使館員との約束もない女を警備員が入れるわけもない。しかしなんだかとても思い詰めた様子なので、何とか力になつてあげたいとは思うけれど、でも、いったいどうすればいいというのだろう。

「私の名前はアマル。でも日本人のレイコと言う名前が好き」と言う。どこで「レイコ」なんて名前を知つたのだろう。この町に滞在している日本人はわずか三〇人弱で、女性は子供を入れても一〇人に満たないのに。

サナアの町では、男と女が道路の真ん中で立ち話などという光景はまず見られない。しかも一方が外国人で、他方が黒づくめのシャリシャフ・スタイルの女性という取り合わせは相当奇異な光景である。おまけに彼女の父や兄はかなり厳しい人らしいではないか。そんな彼女とこんなところで話しているのを目撃されたら、ライフルで撃たれないともかぎらないので、私は少しそわそわする。

そもそもどうしてここにいたのだろう。ここで日本人が通りがかるのを待つていたのだろうか。だけど、悪い旅行者だったら、さらって行ってどこかに売り飛ばしてしまうかもしれないじゃないか。

彼女は学生で、サナア市の東のほうに住んでいるという。大使館は町のかなり西のはずれにあり、小さな町とはいえかなりの距離がある。彼女はいつたいどうやってここまで来たのだろう。もちろんバスなどないし、日本大使館はダッバープのルートからもはずれていないのだ。「友だちの家に行くと言って、無理矢理家から出て来ました」。歩いて来たのかもしれない。彼女も話をしている間、通りがかりの人の視線が気にかかる様子。

ともかく「わがまま言わずに我慢しなさい」とは無責任に言えない雰囲気だし、かといって今ここで彼女を助手席に乗せるなんて暴挙はどう考えてもできない。「来週の水曜日に、うちに来てごらん」と言ってみる。来週なら日本人女性が来る予定だから、家のなかで彼女と二人つきりという状況にはならないだろう。それに一週間すれば彼女の気まぐれもおさまるかもしれない。

わが家の場所を教えると、彼女は「どうもありがとう」と去って行った。こんな事態に遭遇したのは初めてなので、すこし考え込んでしまう。なぜ彼女はこんな大胆な行動に出たのだろう。もしかして意に添わない結婚をさせられそうになって、家出をするつもりなのではないだろうか、などと想像は膨らむ。サナアでも十三歳〜十五歳で嫁入りする例は今でもけっして珍しくはない。それはそうと、今日のがばれて来週兄や父親と一緒に

怒鳴り込んできたら、なんと釈明すればいいのかも、考えておかなければ。

外国へのあこがれ

翌週の水曜日。その日の朝サナアに着いたばかりの日本人大学院生と自宅で話をしていると、午後一時半、コンパウンド（私の家は塀で囲われた外国人用住宅にあった）の門番から電話が入る。本当にアマルがやって来た。

なんと破壊的な行動力だろう。イエメン人の女の子が外国人のいるコンパウンドにやって来るなんて、十年前には考えられもなかった。自分の家にイエメン人女性が訪ねて来たことなんて、前回（一九八〇年代後半）三年間サナアに住んでいても一度もなかったのだ。

ゲートまで迎えに行くと、今日のアマルはグレーのバルトーを着て、白いヒジャーブをかぶり、目の上下に黒いはちまき状の顔覆い、ブルカをしていた。こないでたちの女性と握手をしたのも初めてだ。家に入ると、アマルはバルトーとブルカをかなぐり捨ててように脱いだ。くだいようだが、これまで十五年間イエメンを研究してきたが、目の前で女性がベールを脱ぐところを見たのは初めてだ。一瞬目のやり場に困ってしまった。

素顔のアマルは色が黒めのおてんばそうな娘。年齢は中学三年生の十六歳。表情はまだまだ子供である。アマルは片言の英語で語り出す。「父親と兄が嫌い、お母さんも嫌い、

兄嫁も理解してくれない。結婚した姉は夫にぶたれる。あたしも父や兄にぶたれる。父は私に勉強させてくれない。中学を卒業したら働けという。でも同時に外に出ることをよく思っていない。「イエメン人は、誰一人私を理解してくれない」「イエメン国民はホープレス（望みがない）」「だけど日本人は親切、日本はきれい。テレビで日本の番組を見たの」「私は日本に行きたい。パスポートがなくても船で行けば船長がパスポートをくれると聞いたわ」とたたみかけてくる。いったいどうするとこんな風に思いこむようになるのだろうか。

「私は今すぐ日本に行きたいの」「日本の大使は助けしてくれるかしら」「大使に会わせてほしいの」と続く。とにかく熱を冷まさせなくちゃ。大学院生と二人がかりで「ルールはルールだから、大使だろうが誰だろうが、パスポートなしで日本に行かせてはくれないよ」と説明する。納得していない様子。「イギリス大使館のミスター・ジエームスという人はお姉さんを助けてくれるかもしれない。姉はオランダかイギリスに行きたいの」と言う。

でも、どう考えたって中卒で日本に行つてどうなるものでもない。だから「日本に行きたいんだつたらまず、日本語を勉強して、手に職をつけないとだめ」と言う。すると「だ

「つてお父さんは勉強させてくれないんだもの」と泣き出す。うーん、確かにこの国ではそういうことはあり得る。そもそも女性がパスポートを手に入れようとすれば、多くの場合どうしたって父親か夫などの「保護者」が申請することになるのだ。仮にアマルがうんと勉強して、手に職つけても父親が認めなければパスポートを入手することは絶望的なのだ。

「今すぐ日本に行くことはできないの？」それは無理なんだよ、アマルちゃん。

「じゃあ何年待てばいいの？」どうしてそんなに焦っているの、アマルちゃん。君はまだまだ若いのに。とはいえ、彼女に残された自由な時間は残りわずかかもしれない。

それでもわれわれに言えることは、せいぜい「これから二年ちゃんと勉強してごらん、君のそういう姿を見てお父さんの考えも変わるかもしれないし」くらい。今の彼女にはまったく説得力がないことは明らかだ。

「その間に無理矢理結婚させられてしまつかもしれないわ」。大いにありうると思う。

「二年たつたら必ず助けてくれますか」おいおい。大変なことになつちやつたよ。とにかく少し落ち着かせなければ、と彼女の目の前で大使館に電話を試してみる。大使館の友人に「日本語のテキストもらえるかい」と聞くと「あげますよ」というので、アマルのために取りに行く。大使館には日本に国費留学したり、短期間研修に行く人のためにこうした

テキストがあるのだ。日本語の教科書とカセットテープをもらってきて渡すと、アマルはとりあえず帰っていった。今日は家から二時間かけて歩いてきたのだという。タクシーになど乗れないし、彼女の大嫌いなイエメン人男性と隣り合わせに座るダツパーには乗りたくないのだろう。もしかしたら、お金がないのかもしれない。ここでタクシー代など渡してもいいけれど、そのことを親が知ったらどう思うかと考えると、余計なことはしないほうが賢明だと思う。

不良少女

その後、アマルは時々家に遊びに来るようになった。カセットテープの勉強の成果で、「こんにちは」「お元気ですか」などの日本語も少しずつ上達した。どうやら頭は悪くないようだ。アマルが持ってきた中学三年生用の英語の教科書には、日本人ユキとイエメン人フアドが文通して、フアドが日本に旅行するというストーリーがあった。イエメン人の日本へのあこがれはこんなところでも醸成されているのだ。それを嬉しそうに僕らに見せて、「今すぐ日本に行きたい」が始まった。アマルはいつも突然やって来ては、「どうしたら日本に行けるの」と答えに窮する問いを発して帰っていく。困った娘である。

はじめの頃アマルは家のなかでヒジャーブを脱ぎながら、「私は顔を隠すのが嫌い。で

もお母さんがこの格好でないと外出を許してくれないの」と言っていた。しかし何度か来るうちにだんだんと大胆になり、コンパウンドの入口でヒジャーブを取り、顔を出した状態で家にやって来るようになったし、バルトーも脱ぎ捨ててジーパン姿でコンパウンド内を闊歩するようになった。イエメンの基準では完全に不良少女である。

アマルの家族構成は父母と一〇人の兄弟姉妹で、アマルは六番目。家族はみんな嫌いだし、イエメン人もみんな嫌いだけれど一つ上のお兄さんだけは良い人で、彼は今オランダに「政治亡命」していると言う。いったいに、イエメン人はかなり気楽に「亡命」する。旧南イエメンの政治家も内戦以降ずいぶん亡命しているが、このお兄さんの亡命の理由はよくわからない。お父さんはアマルに働けと言うが、外国に行くことは許してくれない。母親にいたっては、家の外に出るのさえやかましくとがめるのだという。

しかしアマルの外出はさらに大胆になっていく。ときにはパレスチナ人やイラク人のボーイフレンドを連れてやって来たりするようになった。聞けば彼女が町なかで「ナンパ」して、「私には日本人の知り合いがいるのよ」と自慢かたがた連れて来たらしい。いったい、彼女の両親は彼女のこうした行動を把握しているのだろうか。

また、友だちになった日本人女性を訪ねてサナア旧市街のホテルに出かけ、たまたまそ

ここにいたアメリカ人の旅行者男性としばらくおしゃべりをしてホテルから出たところで、「風紀警察」につかまったこともある。そのとき日本人女性も聴取を受けたが、どうやら彼女がアメリカ人男性にアマルの売春を手引きしたのではないか、という嫌疑をかけられたらしい。いずれにせよ、アマルはすでに「要注意リスト」に入っているのかもしれない。さて、「困ったアマルちゃん」の将来はどうなるのだろうか。いつの日か日本にたどり着けるのだろうか。それともその前に結婚させられ（ほとんどのイエメン女性のように）一生外国なんかに行かない人生を歩むのだろうか。

アマルを見ながら考え込んでしまう。社会がそれを受け入れる態勢になっていないときに、よそ者が自分たちの価値観に基づいて「女性の自由」や「権利」を跛行的に教え込もうとすると、アマルのように「社会から浮き上がった」子が出てきてしまうのではないだろうか、と。それは「啓蒙」という名の、無責任な「扇情」ではないのか。「目覚めた」アマルの期待と野望を、よそ者であるわれわれはどうしてあげることができないのだ。数年間しか住まないわれわれは彼女の人生に責任をもつことはできないからである。彼女を養女にして日本に連れて帰ったところで、それは今後どんどん増えてくる「アマル予備軍」たちにとっては根本的な解決にはならない。

個人的には、それが「イエメン女性の置かれている地位の低さ」に対する反発からであったとしても「イエメン人が嫌い」などと言うイエメン人はあまり好きではないし、「お父さんもお母さんも嫌い」なんて言う子にはちょっと抵抗がある。

しかし一方で「ベールをかぶっているからといってそれが、女性の抑圧をすぐさま意味するわけではない。イエメンの女性たちはベールというアラブ・イスラムの生活文化のなかでそれなりの自己主張をしながら生きている」などと書きながら、いつもどこかで「ほんとにそうか」と自問自答していた自分がいることも事実なのだ。

イエメン社会の変化を観察し、理解するのが地域研究者としての役割だが、そのなかでしばらくはアマルの成長を見守っていききたいと思う。